

マウス IgG抗体に強い非特異反応を示した慢性Bリンパ性白血病の 症例

山本 智恵美, 津田 勝代, 前川 芳明, 松尾 収二 (天理よろづ相談所病院)
林田 雅彦 (天理よろづ相談所医学研究所)

今回マウス IgG1 抗体と強い非特異反応を示し細胞表面抗原 (マーカー) 検査が困難であった慢性Bリンパ性白血病 (B-CLL) の 症例を経験したので報告する。また, 本症例の非特異反応の原因について若干の検討を行った。

【症例】

60代女性。某年9月他院にてWBC増加を指摘され当院紹介受診。軽度の脾腫, WBC 21500/ μ l, PLT 13.5万/ μ l, Hb 14.1g/dl, 小型リンパ球を92%認めた。マーカー検査はマウス IgG抗体と強い非特異反応を示したため, IgG抗体以外で検索したところCD19, 20, 23(+), CD5, 10(-)で, sIg typeに単一増殖性を認める成熟Bリンパ球であり, B-CLL stage と診断された。無治療で半年経過後, 発熱, 両下肢痛および腹腔内リンパ節の腫大を認めた。WBC16700, PLT3.7, Hb8.7で, 初診時の小型リンパ球に加え大型リンパ球を認め, Richter症候群と診断された。マーカー検査では小型と大型の細胞ともに初診時とほぼ同様であった。

【方法】

非特異反応の原因とFcRの関係を調べるために, 非腫瘍

細胞 (末梢単球, 顆粒球) および腫瘍細胞に対するマウス抗体の結合性をサブクラス別 (IgG1, G2a, G2b, G3, IgM) にみた。また非特異反応の抑制試験を, 熱変性 IgG, AB型血清, Alb, Glob, 抗FcR抗体 (CD32)を用いて行った。

【結果および考察】

非腫瘍細胞に対するマウス抗体の結合性は, 一般的な健常人と差を認めず, FcRの結合性は正常と考えられた。一方, 腫瘍細胞はIgG抗体とのみ強い結合性を示した。

非特異反応の抑制試験では, 熱変性 IgGで強く抑制されたが, 非加熱のGlobによる抑制は軽微であった。また抗FcR抗体で抑制されなかったことから, 非特異反応に対するFcRの関与およびFcRのアベラントな遺伝子の変異は否定的と考えられた。

【まとめ】

マウス IgG抗体と強い非特異反応を示した慢性Bリンパ性白血病 (CLL) の 症例を経験した。非特異反応の原因はFcR以外の膜抗原と考えられた。

0743-63-5611